

戸川昌子

サンケイ新聞社

幻影の牙

戸川昌子

昭和45年9月10日1刷
昭和45年11月27日4刷

定価 四八〇円

<検印省略>

発行者 竹内 格

印刷 図書印刷株式会社

製本 田中製本印刷株式会社

発行所 サンケイ新聞社出版局

東京・中央区江戸橋一の七(103)

大阪・北区梅田町二七(530)

乱丁・落丁はおとりかえいたします

© 戸川昌子 1970 Printed in Japan

0093-070578-2756

目次

団体のお客様	7
きき耳	13
好敵手	20
遊び	26
面会	33
取り持ち	39
尾行	46

脅迫	52
噴霧状態	59
真昼の追従	66
不安な夜	72
ダイヤとタキシード	79
窮地	85
新しい仕事	92
荒療治	98
疑念	105
華やかな製品	111
邪魔な女	118
不良の品	124

幽 霊	講演旅行	お面の下	狐芝居	悪霊の囃	占 い	狐憑き	般若の面	不 運	あがき	予期せぬこと	焰と泡の中
204	197	190	184	177	171	164	157	151	144	138	131

鉛の毒

波紋

死亡時刻

死因

二人の巫女

暗闇での光り

まさぐる

物の翳

事実

再び

211

217

224

231

237

244

250

257

264

270

幻影の牙

装幀・前
川
直

団体の客

誰かが肩をゆさぶっている。瀬木山は眠りの底から必死にもがき、やっと浮かびあがった。しまった、見破られたのではないかという焦慮と不安が、一瞬、脳裏をよぎった。

「お弁当とお酒です。どうぞ……」

団体の世話役らしい男が、慌しげに、ろくに瀬木山の顔もみずに、折り詰めと日本酒の小瓶を膝の上に置いている。

「やあ、どうも……」

瀬木山は陽に灼けた、どちらかというところ角ばった顔に、愛想のいい笑顔を浮かべた。

普通の人間ならば、団体客の中にこっそりまぎれこんでいるのに、世話係りから弁当を渡されたりすると、なんとなくどぎまぎして落ちつかなくなるものである。

ところが瀬木山は平気であった。人懐っこい口もとから白い歯を覗かせただけで、顔色一つ変えなかった。

「名古屋まで、あとのくらいありますかね」

と、相手にわざとこちらの顔を印象づけておく。

瀬木山は気怠い汽車のリズムに合わせるようにして折り詰めをあげると、瓶の冷や酒を飲んで旺盛な食欲を示しはじめた。

彼は東京駅で、どうにも席がとれないとわかったと、目についた団体客の車輛のほうに素早く移ったのである。はじめから、団体客にまぎれこんでどうこうしようという気があったわけではない。

席がなかったから、空いている席に移っただけであつた。せっかくの空いている無駄な空間を利用してなぜ悪い。ひとを押しつけて坐ったわけではないのだから……というのが、瀬木山の理屈であつた。

彼は大阪に行くつもりなのに、もともと切符は買つてなかった。入場券だけであつた。

運賃を精算せずに乗れた場合は、特急券など買つていたら大損をするというのが彼の考え方である。

それに、今は団体の車輛にいたので検札の心配はなかった。いつまでも眠った振りなどしていいので、周囲の人間と接触して情報を仕込まなければならぬ。

折り詰めをきれいに平げてしまうと、うしろの座席を見まわし、ぎすぎすした感じの四十過ぎの女がお茶を飲んでゐるのに目をやった。身なりや、胸に支部長とつけ

た名札からみて、この団体客の中では重要人物のほうらしい。

それだけを素早く判断すると、彼は一時も躊躇をせず
にその女の隣に坐った。こういう立場の女の隣席が空く
などということは、そう滅多にあることではなかった。
隣の席の男が手洗いに立ったほんの一瞬を見て、図々し
く坐りこんだのである。

「名古屋まで近くなりましたね。どうでしょう、今度は
バスを借りきって行きたいものですか」

などと、まるで愚にもつかないことを熱心に、大袈裟
な身振りで喋べる。目的は相手の関心を得るためではな
く、周りの客に、自分と団体の役員らしい女が親しげに
しているところを見せるためなのである。

トイレがあくと、

「やあ、お邪魔しました」

とさっと立ちあがり、背中を見せた。

「今の人は誰なんですか」

と、その役員の女と連れの男が不審そうな顔をしたが、
他の団体客にはまるでそんなことはわからなかった。

不思議なもので、なんとなく団体客の中の顔役のひと
りだと思ってしまうものなのだ。

瀬木山はトイレに行くと顔を洗った。この連中と名古屋

屋まではいけるが、そのあとはまた大阪までの席を捜さ
なければならぬ。

瀬木山は思案にくれた。このときはまだ、この団体と
一緒に名古屋で降りるつもりはなかった。

洗面所の鏡を覗きこんで、ルパンカ風のシャツのボタ
ンをはめた。瀬木山は意外とお洒落なところがあつた。

顔だけは、意志の強そうな顎の張ったはつきりした感じ
で、体格も柔道五段だけにがっちりとした逞しい長身
だったが、目もとが柔和で人を惹きつけ、安心させる。

「恐れ入りますが、ちょっと洗面所を貸していただけま
すか。気分が悪いものですから……」

うしろから、ふいに三十四、五歳の和服の女が来ると、
瀬木山の立っている横の洗面台に倒れかかった。やはり、
この団体の一員らしい。

「どうかなさいましたか」

瀬木山は親切げに女の背中に手を廻した。不思議とこ
の男は、相手の信頼感と安堵感を呼びさますのがうまい。
「すみません、胃痙攣なんですの。薬を飲みますから
……」

「大丈夫ですよ、すぐに直ります。旅行に出られたのは
お久しぶりですか。たまに乗り物に乗ると、誰でも具合
が悪くなるんですよ。さあ、ぼくが背中をさすってあげ

ましよう。高尾山の山伏療法でしてね、少し強く押しませんが、胃痙攣ならばすぐに直るはずです」

瀬木山は、女の帯の下の方の背骨の下に親指を当てると、ぐっと力いっぱい押した。彼は合気道も空手も一応こなす。指圧療法もなかなか巧みであった。

女の胃の裏を力いっぱい押してやったあと、ついで紙コップの水を運んで来ると、女の項に軽く手をかけて仰向けさせ、薬を飲ませてやった。ゆうかり織りのハンドバッグから薬を取り出すときに、かなりの札がその中に入っているのを、瀬木山はついに見届けておいた。

この団体客が、東京のG地区の美容院関係の一大団だということとは、すでに周りの会話から瀬木山にも大方の見当はついていた。

「すっかりお世話になってしまつて……あたくし、M駅前のハマ美容院の田代圭子と申します。ご迷惑をかけて申訳ございませんでした」

相手が丁寧に挨拶するのに、瀬木山は感じのいい微笑でゆつたりと頷きかえし、

「ぼくの名刺は向うの上着に入っていますので、いづれ後ほど……ぼくは瀬木山雄二、パリ支部の連絡をやっています」

と、実にスムーズに嘘が口から出た。

パリ支部云々というのはまるつきり嘘で、口から出まかせではない。

三年ほど前に、瀬木山は美容界にしばらくのあいだ首を突込んだことがあったのである。突込んだといつても彼が関係した百近い仕事のうちの一つだからどうということはない。しかし、美容界に若干の知識があることだけは確かだったのだ。

瀬木山はかつて、美容師の観光団というのを企画したことがあった。今ほど海外旅行が盛んでなかった頃である。企画書というのを作り、三十名の団体で、期間は一週間、行く先はパリということにした。パリの美容室の視察、ならびにフランスの一流講師による集中講習会、そのあとでパリ美容組合長よりフランス美容師試験合格者の賞状をおくるという触れこみなのであった。

そのかわり、費用は一人が九十九万円だといふのである。

実際のヨーロッパ旅行の費用よりも十万円ほど高いが、その店の美容師にはパリ帰りという箔がつき、ひいては客が増えるのだから安いものではないかといふのだった。こういう企画をたて、書類にしてから、小さな旅行会社に行き、航空会社を通じて、パリの美容組合の組合長

のサインの、

「日本の美容師の皆さん、パリはあなた方を心から歓迎します」

というフランス語の自筆の手紙を貰ったのであった。

それを、「九十九万円のパリ・ヘア・デザイナー・コース修了旅行」と銘うったちらしに、頭の禿げたフランス人の組合長の写真入りで印刷したのである。

東京中の美容院を廻ったが、彼の思惑ほど希望者が集らず、十五名ほどだったが、なんとか商売にはなった。旅行社に飛行機代とホテル代を払い、自分は香港までついて行つてあとはドロンをきめこんだのであった。

旅行社のガイドは、パリに着いてから泣く思いをしたが、参加者は初めてのパリなので、今日はエッフェル塔、明日はディオールの店と歩き廻り、肝心の美容院は二、三軒——といっても自分の金でセットをさせただけだったのだが、それで大した文句は言わなかった。

一晩だけ食事に招いた美容関係の男だというフランス人に、一時間ほど喋べらせて、それを適当に通訳し、講習会はすべて終りということにしてしまったのである。参加者は観光気分なのだから、しち面倒くさい講習会よりも、パリを見物して買物をしているほうがよほど愉しかったのだ。

そのうえ東京に戻ったときには、瀬木山が街の額縁屋で作らせた、金縁の一見立派な講習会卒業免状が出来あがっていたから、文句を言うはずはないのだった。

瀬木山はそのへんはよく心得ていて、やり放しにはせず、免状だけはちゃんと旅行社の事務所に届けておいた。免状自体は三千円もかければかなり立派なのが出来る。それで三十万が手に入るのだから目出たし目出たしで、一度やったらやめられないことであつた。

騙されるほうにしても、もともと一週間の超速成で、パリで美容師の免状をとつたというエリート面をしようというのだから、騙されたと抗議を申し込むわけにもいかないのだ。

額縁に入つたフランス語の免状さえあればよいのであつて、かりに、それで客が増えなかつたにしても、虚栄心の満足だけは充たされるわけであつた。

それだから、瀬木山は一つも悪いことをしたとは思つていなかったのである。

世の中の奴らは金を握っている。それをどうやって吐き出させるか——自分のほうから愉んで吐き出させるにはどうしたらよいかが、彼にとつての大問題だったのだ。気分が直つたと言つて、感謝の言葉を続ける田代圭子を彼女の座席に連れ戻すと、そこで冷凍蜜柑を一つ食べ

た。座席の肘掛けに腰をおろして、いかにも団体の人間らしい顔をしている。

間もなく制服の専務車掌が「皆さま、もうすぐ名古屋でございます」と言つて、瀬木山のそばを通り過ぎた。

「本当に助かりました。向うに着きましたら、ゆつくりと御礼を申しあげますわ」

田代圭子という女が、熱くうるんだ目つきで瀬木山を見あげる。彼は持ち前の優しく魅力的な目をしばたかせて領きながらも、さて、これからどうしようかと一生懸命に頭を働かせていた。

そのとき左の頬に、ふと鋭い視線を感じた。じつと瀬木山を見つめている感じなのである。さつとそのほうを振り向くと、断髪の二十七、八歳の女であつた。

見覚えはまるでなかつた。心にひっかつたが、そのままになつてしまつた。列車が名古屋駅のホームに滑りこんでしまつたからである。

瀬木山は自分の席に、いつも肩にかけている黒いバッグとカメラを取りに戻つた。ひょっと前の座席を見ると、誰かが忘れたのか、"G地区美容連合会"と染め抜いた紺色の旗と腕章が置いてある。

瀬木山は少しも慌てずに、その腕章を腕に巻き、旗を持った。座席の団体客がわつと立ちあがつて、通路を流

れはじめた。

瀬木山は旗を高くあげて、悠々と歩いて行つた。

団体客はG地区だけで七十人近くいた。一軒の美容院から、二、三名ずつ参加しているらしい。

せめてこの連中の半分でもバリ講習会に行つたら、もっと資金が集まつたものと、忌々しく思いながら歩いてた。

改札を一番に旗を持って出た瀬木山を、誰も疑わなかつた。

こういう団体客にまぎれてしまうと、誰が誰だかわからなくなつてしまふらしい。いつのまにか連絡係の幹事から、瀬木山は平野さんと呼ばれていた。平野という男が、都合で遅れているのか、来られなくなっているらしい。

向うからきた偶然を利用して、瀬木山は平野という男になりすますことにした。騙しているのではなく、向うが勝手に間違えたのだから仕方がなかつた。

部屋割り当てが決つたが、瀬木山は自分の部屋には行かなかつた。大宴会場で夕食会がはじまるまで、大浴場に入つたり、熱帯魚を見学したりしていた。

団体客が投宿したのは、名古屋からバスで一時間ほど、

A 湾に近いN温泉である。

夕食会がはじまってから、瀬木山は浴衣と丹前に着替えて、宴会場に出た。こうなつてしまえば、もう誰が誰だか絶対にわからないはずだった。今度の旅行で顔を合わせるまでは、一面識もない人々が多い。車中でなんとなく顔見知りになつていたし、疑う者は誰もいなかった。幹事が退屈な挨拶をしているあいだに、にっこり笑つて席を空けた田代圭子の隣に行つた。

小柄だが、浴衣に着替えて湯あがりの肌を上気させているところなどは、けつこうむつちりとした腿のあたりで女盛りを感じさせる。細帯でしめた胸はくびれ、丸い握めそうな乳房は健康そうで、列車の中で気分が悪いなどと言つたのが嘘のようであつた。

膳と膳のあいだが狭いので、自然に腰が触れ合う。瀬木山は出された盃を巧みに返盃して相手に飲ませ、身の上を聞き出そうと試みた。

「ご主人は、ご一緒にいらつしやらなかつたのですか」

「いやですわ……あたくし、まだ独身なんですのよ」

「それは失礼しました。あなたのような魅力的な方を、男性が放つておくはずはないと思ひましてね……」

齒の浮くようなことを平気で口にした。女というものは、真実らしく褒めればいいというのが彼の鉄則である。

適当に^{きざ}気障で、こんなときの瀬木山は、いったい三十歳なのか四十歳なのかという戸惑いを相手に与えた。男で、これほど年齢不詳なものも珍しい。

芸者が来て席が乱れるころには、瀬木山は女の身の上をすっかり聞き出していた。駅前に自分の地所があるとかで、思つたより派手に店をやっているらしい。

ドライヤーが十台もあると聞いて、瀬木山はふんと感心した。美容院も全体で三十坪近くあるらしい。

「こういうときは、最初にお茶漬けを食べておいたほうがいいですよ。飲みすぎるといけませんからね」

心にもなく親切ごかしを言つたあとで、

「でも、こんなに飲んだら、また胃^い痙^{けい}攣^{れん}を起こすかな、もし痛くなつたら、またすぐと呼んでください」

と、抜け目なく部屋に行く口実を作つておいた。

宴会場を抜け出して部屋まで送つて行くと、案の定、胃が痛いと言ひ出した。今度は列車の中と違つて、浴衣と細帯一つである。瀬木山は女を俯伏せにさせ、胃のうしろを押えてやりながら、どのようにして相手の舐を奪おうかと考えた。

女の場合はまず、強引に事を運ぶのが肝心である。

彼は部屋の鍵を、わざと音をたてて内側からしめた。この部屋の割り当ては、女ばかり四人ということになつ

ている。

まだ宴会はたけなわだから、他の連中は帰ってはこないだろうとたかをくくって、田代圭子に近づいた。

すでに女中の手で敷かれてある蒲団の上に、田代圭子は横になっている。女を誘惑するのには、絶好のムードだった。

瀬木山は故意に荒々しく田代圭子を仰向けにすると、唇を合わせた。女が喉の奥で、猫の鳴くような甘えた声を出している。

そろそろと、女の乳房の上に置いた手を、むっちりした腿の内側に伸ばそうとして、瀬木山は、ハッと気がついた。部屋の一審奥の蒲団に、誰かがすでに寝ている気配がしたのである。寝た振りをしているが、じっとこちらを窺っている様子だった。

瀬木山は腹を決めて、すでにうるおっている女の軀の芯に臆せず手をのぼした。田代圭子は、同室者がいるのにまるで気づかないのか、すぐに官能の喘ぎを洩らしはじめた。

き き 耳

この部屋の中に、もうひとり女がいる——そう思っただけで、普通の人間ならばひるむところだが、瀬木山はちがっていた。かえって闘志のようなものが湧いてくるのだ。自分がいま抱いている腕の中の田代圭子という女より、部屋の隅のほうの蒲団の中で息をひそめている女のほうに興味を向けてしまうのである。

瀬木山は愛撫の手を休めずに、そちらのほうの女を観察した。

部屋の中が暗いので顔がさだかではないが、向うは目を開いていて、じっと息をひそめている感じである。

瀬木山は枕もとに手をのぼすと、ぼんぼり型の小さなスタンドをつけた。光りが闇に滲むと、まず目の前の田代圭子の顔が浮かびあがった。額の生え際のあたりの髪の毛が汗でべったりとつき、厚い胸もとを喘がせている。久し振りの快楽の深い淵に、おぼれきっているのが手にとるようにわかった。

瀬木山は、そのままの姿勢で、部屋の隅の女のほうに

視線を移した。スタンドのせいで、今度は横顔がはっきりと見える。まだ若い、二十二、三の女だなど考えた瞬間、たしかどこかで見たことのある顔だと思い当った。

しかし、ふとそう思っただけで、すぐに誰ということとはわからなかった。しばらく考えた末、来るときの列車の中で、じっと瀬木山を非難するように見つめていた女だということに気づいた。

他の団体客が、すべて瀬木山の存在を当然のこととして受け入れはじめていたときに、この女だけが疑惑に満ちた目で彼を刺していたのである。

瀬木山は躰の位置を変えた。自分の首にからみついていた田代圭子の手をずらし、向うの女がよく見えるように首をのばした。

鼻が外国の女優のように高く、色が白いが、顎のあたりに気の強そうな性格が滲み出ている。どこで見た顔だろう、来るときの列車の中だけではない、どこかで見たことがあると、瀬木山は真剣に記憶をまさぐった。大抵の場合、一度見たことのある顔はめったに忘れないのに、今度の場合、どうしても思い出せないのだ。

瀬木山の躰の下の方田代圭子は、ますます喘ぎ、躰をくねらせはじめていた。もうすっかり自分を失ってしまっているらしい。あたりかまわず声をあげるのである。

瀬木山は、向うの女のこれからの行動に興味があった。これだけ隣で声をあげられれば、おそらく怒って部屋を出て行くのではないだろうか。その時はその時だというのが、瀬木山の気持だった。はつきり顔を合わせておいて、他の団体客にはわからない絆を作っておくべきかもしれない——瀬木山はそんなことを考えていたが、向うの女は一向に起きあがる気配がなかった。

依然としてしっかりと目を閉じて眠っている振りをしている。それとも本当に眠っているのだろうか。瀬木山はふとそう思ったが、すぐにその安易な観察を否定した。女の小鼻に、汗がじっとりと浮かびあがっていたからである。

目を閉じているだけに、その物音と気配から、女の内部分で隣の情交の模様が大きくふくれあがり、この女を押しつぶしているらしい。

そのとき、また田代圭子がいきわ大きな声をあげた。もう廊下にも聞こえるような、我を忘れた快楽の極まりの声であった。

瀬木山のほうは、冷静に次の手を考えていた。隣の女も目を閉じたふりをしながら、しきりに妄想の世界で身もだえしているならば、ついでに交わりを持ってしまふことである。